

竹林の風

～ すべては学校のため すべては子どもたちのため ～

栃木県教育委員会事務局
河内教育事務所
令和4年11月21日
発行責任者 西村和孝
http://www.pref.tochigi.lg.jp/m51/
kawachi-kyouiku@pref.tochigi.lg.jp



第64号

子どもの健やかな成長を支えるために



1 令和3年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査（文部科学省）から

【不登校児童生徒数の推移と要因】

令和3年度の全国の不登校児童生徒数は、前年度から小学校で18,148名、中学校で30,665名増加しました。不登校の要因（主たるもの）で最も多いのは、小・中学校ともに「無気力・不安」であり、それぞれ約50%を占めました。しかし、「無気力・不安」を要因として把握するのみでは対応の検討のためには十分ではなく、その背景にある「外的要因」の把握に努める必要があると考えられます。

不登校の要因（主たるもの） 小・中学校合計（回答形式：単一回答）

無気力・不安（121,796名）	50%
生活リズムの乱れ・遊び・非行（28,749名）	12%
いじめを除く友人関係をめぐり問題（23,741名）	10%
親子の関わり（19,712名）	8%
学業の不振（12,759名）	5%
入学・進級時等の不適応（8,053名）	3%
家庭の生活環境の急激な変化（6,457名）	3%
家庭内の不和（4,074名）	2%
教職員との関係をめぐり問題（2,975名）	1%
学校のきまり等をめぐり問題（1,721名）	1%
進路に係る不安（1,574名）	1%
いじめ（516名）	0.2%

2 令和2年度不登校児童生徒の実態把握に関する調査（文部科学省）から

【最初に学校へ行きづらいつ感じ始めたきっかけ（回答形式：複数回答）】

ア 小学校

友達のこと（嫌がらせやいじめがあった）	25%
友達のこと（上記以外）	22%
先生のこと（先生と合わなかった、怖かったなど）	30%
勉強が分からない（授業、成績、テストの点など）	22%
身体の不調（学校へ行こうとするとお腹が痛くなるなど）	27%
生活リズムの乱れ（朝起きられなかったなど）	26%
インターネット、ゲーム、動画視聴、SNSによるもの	18%
兄弟姉妹や親しい友人の影響	7%
学校に行く理由が理解できない	14%
入学、進級、転校して学校や学級に合わなかった	7%
親のこと（仲が悪い、怒った、注意がうるさかったなど）	7%
家族関係（家族同士の仲が悪い、家族の失業、離れ離れ）	5%
きっかけが何か自分でもよくわからない	26%

イ 中学校

友達のこと（嫌がらせやいじめがあった）	26%
友達のこと（上記以外）	26%
先生のこと（先生と合わなかった、怖かったなど）	28%
勉強が分からない（授業、成績、テストの点など）	28%
身体の不調（学校へ行こうとするとお腹が痛くなるなど）	33%
生活リズムの乱れ（朝起きられなかったなど）	26%
インターネット、ゲーム、動画視聴、SNSによるもの	17%
兄弟姉妹や親しい友人の影響	6%
部活動の問題（合わなかった、人間関係、試合に出られない）	13%
学校に行く理由が理解できない	15%
入学、進級、転校して学校や学級に合わなかった	10%
親のこと（仲が悪い、怒った、注意がうるさかったなど）	9%
家族関係（家族同士の仲が悪い、家族の失業、離れ離れ）	6%
きっかけが何か自分でもよくわからない	23%

不登校の児童生徒自身が回答した本調査では、上記「1」の教師を対象に行った「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」では少なかった「嫌がらせやいじめ」「先生のこと」「勉強が分からない」などの回答が小・中学校ともに多く計上されました。

この二つの調査では回答形式等が異なる*ことに留意が必要ですが、これらの回答状況からは、不登校の要因は複数あり、複雑に絡み合っている可能性があることがわかります。

また、不登校の子どもたちは、大人への相談に至らず、どう対処していいかわからず一人悩んでいる可能性があることなども見えてきます。もちろん、教師や保護者による見立ては極めて重要であり有用ですが、そこには限界があり、今まで以上に、子ども自身の声に耳を傾けることが求められます。

*回答形式が単一回答、複数回答と、質問項目が「不登校の要因」、「最初に学校へ行きづらいつ感じ始めたきっかけ」と異なっています。また、集計年度が異なります。

教職員一人一人の誇りと品格は 教育への信頼を確たるものにする

3 生き抜く力を育むために

大人でも子どもでも、悩みやストレスは必ず生じるものであり、他者の力を借りることを含め、それらを柔軟に解決したり乗り越えたりする力が必要です。学校や家庭、地域は、子どもたちに対して、個々の発達段階に応じて、協働しながらしなやかに生き抜く力を育んでいくことが求められています。

- (1) 子どもと本音で話し合える関係をつくる
- (2) 子どものSOSを出す力を育む
- (3) 子どもの乗り越える力、回復する力を育む
- (4) 褒め方、認め方の工夫で子どもの成長を支える
- (5) 叱責や罰を与えるよりも再発防止策を一緒に考える
- (6) 発達の段階に応じた対応をする
- (7) 夢中になれるものや時間を持てるようにする（様々な体験や経験を積ませる）
- (8) 子どもにとっての安全基地を確保する

参考 子どもの問題行動や不登校等を家族心理学から見る

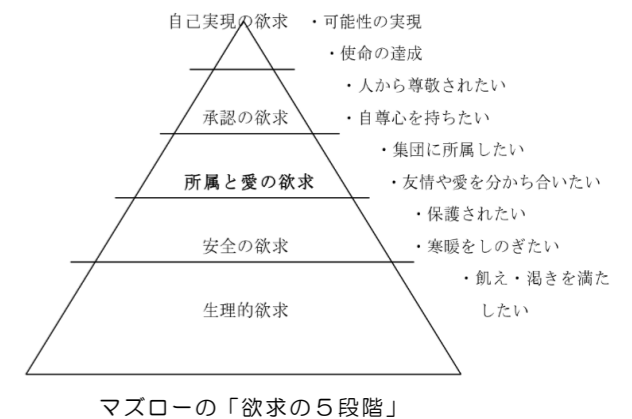
(1) 問題行動や不登校等は子どものSOSの現れと捉える

子どものSOSの現れ方は様々である。一つ目は、心身の症状で、子どもたちの症状としては摂食障害、不登校、自傷、うつなどが増えている。これらの症状は、内向した問題の表現であり、自分の内面で起こっている不安や葛藤が症状化していると受け取ることができる。

二つ目は暴力化傾向で、外に向かった形で表現されているものである。それらには、いじめや非行、他害、犯罪行為などがあるが、最近、低年齢化している傾向が見られている。また、いじめなどの背景には、違いに対する不寛容もあると考えられる。違っていることをおかしいこととして異物視したり、違いは脅威にもなるので排除しようとしたり、理解しにくいので無関心になったりする。また、違いをどちらが正しいかという問題にする傾向もある。まず大人は「違い」は「間違い」ではないということを確認し、子どもたちに理解させることが重要である。

(2) 子どもの存在の不安定さを理解し、所属と愛の欲求を満たす

子どもは、周囲の大人から、存在そのものではなく成果の有無で判断されている傾向があり、不安を抱えている可能性がある。マズローの「欲求の5段階」によると、「所属と愛の欲求」が満たされると、子どもは安心して何かに挑戦し、認められようとしたり、他者から尊敬されようとしたりするようになる傾向がある。しかし、子どもの少子化や社会の成果主義などから、大人が良くも悪くも子どもを管理し、思い通りに育てようとする傾向が強まっている。子どもを「授かる」から「作る」になってきている。



(3) 家族をシステムとしてみた場合

家族システムの考え方では、症状や問題を示した人を、システムの中で「たまたま問題や症状を呈した人」、「家族システムや家族を取り巻く生態システムがうまく機能していないことを示している人」と捉える。症状や問題は、個人のSOSであると同時に、より大きなシステムのSOSでもあると考えられる。

(4) 家族の健康性

健康な家族とは、問題や困難がない家族のことではなく、問題や困難に向き合い、解決することができる家族のことである。家族には発達段階があり、その移行期は安定状態が崩れ、別な安定状態を探る流動期にあたる。例えば、子どもの思春期では、子どもが友達優先の言語表現や異文化の持ち込みをしたり、身勝手に見える安息の要求をしたりするようになる。しかし、この一見矛盾に満ちた言動は、成長のための正常なあがきであり、家族はその矛盾に振り回されることなく、状況に応じて柔軟に変化しながら対応することが求められる。

参考：平木典子他「家族の心理 第2版」（サイエンス社 2019年7月25日発行）

平木典子「家族心理学から見えてくること」（東京大学大学院教育学研究科附属心理教育相談室年報 2007年第2号）

https://www.p.u-tokyo.ac.jp/soudan/070nenpo/pdfs/200602_hiraki.pdf